

「心のたすきをつなぐ」

大介は、小さいころから走ることが大好きだった。中学校では陸上部に入り、練習を重ねていった。自己記録をこう新するたびにますますやる気になり、練習にも力が入った。

大介の住んでいる町には、駅伝で有名な世羅高校がある。これまで何度も全国大会に出場し、何度も優勝をしたことがある。

「自分も、高校生になったら全国高校駅伝に出て、①京都の町を走ってみたい。」
と思うようになった。

高校に進むとき、大介は迷わず世羅高校を選び、陸上部に入った。

高校に入ってから大介は、「全国大会に出る。」という目標に向かい、一生懸命練習にはげんだ。世羅高校の陸上部には、同じ目標に向かってがんばっている仲間がたくさんいた。仲間達がんばっているすがたを見ると、「自分もがんばるぞ、負けるもんか」とやる気がわいてきた。

三年生になった。大介は、広島県予選に選手として走ることになった。大介は、全力で走り、②区間賞をとることができた。チームも大会新記録で優勝し、全国大会への切ふを手に入れることができた。

この調子で行くと全国大会でも走ることができるかもしれない。大介のむねは期待でふくらんだ。

全国大会が近づくにつれ、監督は、
「優勝しよう、今年は勝ちに行く。」

と言われるようになった。

「選手になってもならなくても一人一人が目標を持ち、強い気持ちで練習をしなければ、優勝はねらえない。」

とも言われた。勝ちたい思いは大介も同じだった。

「先ぱいたちができなかった優勝。自分たちが三年生になったときに必ず優勝する。」

仲間達と、いつも話してきたことだった。

いよいよ、メンバーの発表の日がやってきた。大介は、期待と不安の中、自分の名前がよばれるのを待った。だが、メンバーの中には大介の名前はなかった。大介は、補欠として走る準備をしながらも、五区の選手のサポートにまわることになった。

「陸上部員全員で優勝を勝ち取ろう。一人一人、何ができるかをよく考えてくれ。」

監督の声が、どこか遠くから聞こえてくるような気がした。大介は、監督の言葉を聞きながら、こぼれてきそうな涙をぐっとこらえた。

次の日もいつも通り練習があった。練習しなければいけないことは分かっているのに、足が前へ進

まなかった。

「練習しても、全国大会で走れないのに……。」

大介は、グラウンドに立ち、仲間達が練習しているのを見つめていた。その時、選手の一人が通りがかりに大介のかたをぽんとたたいた。

「大介、ありがとう。」

思いがけない言葉だった。「いっしょに練習しているだけなのに、自分が役に立っているのか？」

大介はとまどった。

「そういえば……。」

大介は、広島県予選のことを思い出した。

予選の日は雨だった。コンディションの悪い中走るのは大変だったが、それほど心配はしていなかった。サポート役の仲間が、大介達選手が安心して走れるように、大会コースの下見に行き、実際に走り、道路の状態や走りやすいコースを教えてくださいました。その上、雨の中、大介の荷物^{じゅうぶつ}の運搬^{じゅうはん}や飲み物の準備^{じゅんび}、天候や風向きの確認^{かくにん}をしてくれた。いつもそばにつきそってくれ、心強く感じていた。

そのおかげで、大介は、たすきをつなぐことだけを考え、走ることに専念^{せんねん}することができた。

「ぼくが走る時、いつも仲間がいてくれたんだ……。」

「大介。」

名前をよばれてふり返ると、仲間の一人がにこにこしながら立っていた。かれもまた、選手になれなかった一人だった。

「もう練習は始まっているぞ。みんなが待っているから、早く行こう。優勝^{ゆうしょう}するんだろう。」

「それは分かるけど、おまえはくやしくないのかい。もう、たすきをつなげないんだぞ。」

「何言ってるんだよ、ぼく達だって、ちゃんとたすきをつないでいるじゃないか。」

そう言うと、あたりまえのように、練習している仲間達のところへもどって行った。

「ぼく達もたすきをつないでいる……そうか！」

大介は、大きくうなずくと、はずむような足どりで仲間達の方へ走って行った。

平成二十一年十二月二十日、全国高校駅伝競走大会で、世羅高校は六度目の優勝^{ゆうしょう}を果たす。大介は、選手としての準備^{じゅんび}をしながらも、五区の選手のサポートにまわった。コースの下見を行い、選手の荷物を持ち、レース前にはげました。

大会が終わった後、歓声^{かんせい}にわく競技場^{きぎやうじやう}で、大介は、こうインタビューに答えている。

「自分が走ることより、チームが優勝することの方がうれしいです。」

大介の心からの思いだった。

翌日。優勝の歓喜にわく世羅の町で、優勝パレードが行われた。パレードの先頭のオープンカーで、優勝旗をほこらしげに持つ大介のすがたがあった。

【注】

- (1) 一九五〇年から始まった大会で、一九六六年から現在の都大路(京都)が舞台となった。
- (2) 各区間を最も速いタイムで走ったランナーに与えられる賞。
- (※男子は七区間)

【参考文献】

- 月刊陸上競技 (二〇一〇) 二月号 講談社
- 陸上競技マガジン (二〇一〇) 月号 ベースボールマガジン社
- 中国新聞 平成二十一年十二月二十一日付

